

上秀天ら、新仏教徒の論文が漢訳され（あるいは日本語のまま）、『海潮音』、『南瀛仏教』等の中国・台湾の雑誌に掲載されたことを紹介している。新仏教徒と中国人・台湾人仏教者との直接的な相互作用が分析されているわけではないが、新仏教徒たちの言説の受容と流用（appropriation）、その言説の社会的・政治的機能が分析されている。梁は、『南瀛仏教』と『海潮音』にそれぞれ掲載された境野、加藤咄堂執筆の仏教の戦争観を分析し、戦争遂行の正当性、抗戦のための正当性のメッセージとして、二人の論文が戦略的に流用されたことを明らかにしている。つまり、新仏教徒たちの言説は、雑誌というメディアによって、〈アジア〉と〈戦争〉に密接に関わっていたことが、梁の論文から浮かび上がってくるのである。

今後、〈近代仏教〉（アジア）〈戦争〉の関連を主題化したトランスナショナルな研究の進展が期待される。そして、こうした研究の進展が、一九世紀以降の世界同時多発的な近代仏教の成立と展開を明らかにするための重要な役割を果たすことになるであろう。

### 東アジア世界に対する新仏教徒の視線

高橋 原

近代日本の教団仏教が帝国主義・植民地主義の先棒を担いで戦争に協力したと批判されてきたが、日本が帝国主義へと大きく舵を切ったのと同じ時期に、教団仏教への批判・改革運動と

して始まった新仏教運動が帝国主義にどう向かい合い、東アジアにどのような視線を向けていたのか。本発表では、こうした関心をもって新仏教運動の機関誌であった『新佛教』（一九〇〇―一九一五）の誌面を分析し、そのメディアとしての性質に光を当てる。

まず、運動の中核的メンバーで欧米に長期間滞在していた渡邊海旭、鈴木大拙、杉村縦横など以外にも、新仏教運動への参加者の中に印度・中国・朝鮮への渡航者や長期滞在者がいたことを示し、運動が単なる国内的な文化運動を超え出る視線を内包していた可能性を指摘する。本発表では、北條太洋（新民府、琿春などで領事）、豊田孤寒（山東省済南府優級師範学堂教授）、清水友次郎（大連高等女学院教授、南満会社交渉局翻訳事務嘱託）といった、植民地行政・教育の当事者達や、峯簇良允（浄土宗僧侶、吉林府師範学堂教習・両級師範学堂教習）、太田覚民（ウラジオストク本願寺布教所主任）といった植民地布教に関わった人物達も、広く運動への参加者に含めて考えることにする。

言説空間としての『新佛教』のトランスナショナルな性格が示唆されるが、では誌面においてどのようにアジアが表象されているかという点、貧しく文化程度が低く啓蒙が必要な民衆、墮落した朝鮮仏教といったステレオタイプ的なイメージの再生産にとどまっていることが見てとれる。そこにあるのはアジアの文明化が日本人の天職であるという文明の側からの視線であり、記述内容に『新佛教』ならではの独自性を見出すのは難しい。

これら植民地に滞在していた人物達との交流は、『新佛教』の私信欄の分析によって浮かび上がらせることができる。従来の研究では、『新佛教』は高島米峰ら仏教清徒同志会（新仏教徒同志会）の主張発表の場として位置づけられて幹部会員の論説が分析の対象となっており、周辺から運動を支えた人々、すなわち目次に現われない読者達の活動は視野の外に置かれがちであった。しかし、同志会の会員や購読者の範囲が明らかでなく、誰が「新佛教徒」なのか確定しがたいという実情や、必ずしも統一された主義を掲げないという「自由討究主義」ゆえに一枚岩的な立場が存在しないという方法上の困難を、いわば逆手にとつて、おそらくは購読者であつたと推測される、私信欄にしか名前が見えないような人物達をも広義の運動の担い手として考慮するような新しいアプローチが有効なのではないだろうか。新仏教運動は『新佛教』というメディアによって結ばれたゆるやかなネットワークとして捉えられることとなる。

『新佛教』が旧仏教に対する批判勢力を中核としながらも、仏教界、仏教アカデミズム、根岸派を中心とする文化人、そして社会主義者達といった様々なサークルが交差する空間であつたことは従来から知られていたが、私信欄の検討から、植民地行政・教育・布教の当事者達もこれらサークルに重なり合いながら加わつていたことが確認された。

このことが新仏教運動に独特の力学を与えていたことが、対支布教権問題をめぐる議論から示唆される。帝国主義に迎合するかのような布教権獲得の主張が、植民地の新仏教徒からの反応によって「信教の自由の観点から政治上の保護干渉を拒否す

る」という新仏教運動本来の方向に軌道修正されているように見える。すなわち、ここから示唆されるのは、『新佛教』が、国家の内外、植民地の内外、仏教界の内外に生ずる緊張とパランスの上に言説を生成し得た、仏教系メディアとして希有な存在であつたという可能性である。

### 新仏教徒の戦争観

守屋 友江

本発表では、『新佛教』に掲載された、戦争に関する論説を通して、当時の仏教徒たちの戦争観を考察する。日露戦争と第一次世界大戦という、二〇世紀初頭に起きた対外戦争に際して、彼らが戦争を肯定あるいは否定する論理は何であつたのかを明らかにする。また、鈴木大拙と井上秀天という、ともに『新佛教』への積極的な執筆者であり、禪者であり、海外経験を持ち、かつ国家主義批判を展開した二人の戦争観についても考察を行った。

新仏教徒同志会の綱領をみると、合理主義的・現世主義的な「健全なる信仰」、多様な見解を認める「自由討究」、「政治上の保護干渉を斥く」などがある。この「自由討究」という特徴を反映して、『新佛教』は相反する論説を同時に掲載するが、ここで取り上げたいのは、「政治上の保護干渉を斥く」立場と「健全なる信仰」からの社会倫理の問題である。

日露戦争は両国軍に多数の死傷者を出し、軍事費の大幅増加